

資料紹介 本広礼作『制作餘録 二』

宮崎 治

1. はじめに

『制作餘録 二』は、師範学校時代、大分市で過ごした夭折の日本画家、本広礼に関する数少ない資料の一つ。本広は、正井和行と並び、福田平八郎の弟子格の一人で、順調に 1932(昭和 7)年、1934(昭和 9)年と帝展に入選を重ね、将来を嘱望されながらも、1937(昭和 12)年に不運にも病没した。

『制作餘録 二』は、着色の写生図を多く含み、また押印も数カ所あり、作品の所在が殆ど不明な状況にある本広の画業を伝える、貴重な資料である。その概要については、下記の 2. 『制作餘録 二』を参照して頂きたい。

この『制作餘録 二』に、自筆ハガキ、作品写真を含めた、本広礼関係資料が、本広の親友であった、本多秀雄氏のご子息より、平成 21 年度に当館へ寄贈された。当館では既に、平成 22 年度の常設展示等において公開しているが、本文、スケッチ画共に、資料的価値が高いところから、今回、全文を翻刻し、スケッチ画あるものを中心に、代表的な頁の写真に掲載した。

2. 本広礼について

本広礼【1906(明治 39)年～1937(昭和 12)年】

松山市生まれ。幼いときに両親に死別し、大分県の安心院町で育てられた。同町の膳宮学館準教員養成科卒。後に大分県師範学校、京都市立絵画専門学校を卒業。絵専では、福田平八郎に指導を受け、正井和行は親友であった。1932(昭和 7)年、「雲ヶ畑五月」^{くもがはたごがつ}で帝展初入選。日本画家として将来を嘱望されながら、安心院町において結核で夭逝した。

3. 『制作餘録 二』について

1) 内容

『制作餘録 二』(本多高明氏寄贈)は、京都絵画専門学校在学中、本広礼が、「第 13 回帝展」(1932 年)への出品作、「雲ヶ畑五月」の制作を進める様子を、約 1 ヶ月間にわたって記録した日誌である。同校教室での制作の具体的な取り組み、大分出身の京都絵画専門学校助教授、福田平八郎の指導・助言や、エピソードを含めた学友との親交の様子などが記されており、当時の画学生が作品を仕上げ、出品するまでの、密度の濃い時期の様子が、生き生きと記録されている。

なお、「雲ヶ畑五月」はこの後、同展で初入選を果たし、本広の記念的な作品となった。

2) 体裁

袋綴、一冊、縦 32.3 cm×横 22.0 cm、全 45 頁、墨書・着色・和紙。表紙題箋に「制作餘録 二」とあり、第 9、30、31、36、39 頁はスケッチ画のみ、第 10-11 頁、14-15 頁、20-21 頁、24-25 頁は

二頁に亘ってスケッチ画のみが描かれている。

制作期は、1932(昭和7)年9月1日から10月2日。

3) その他

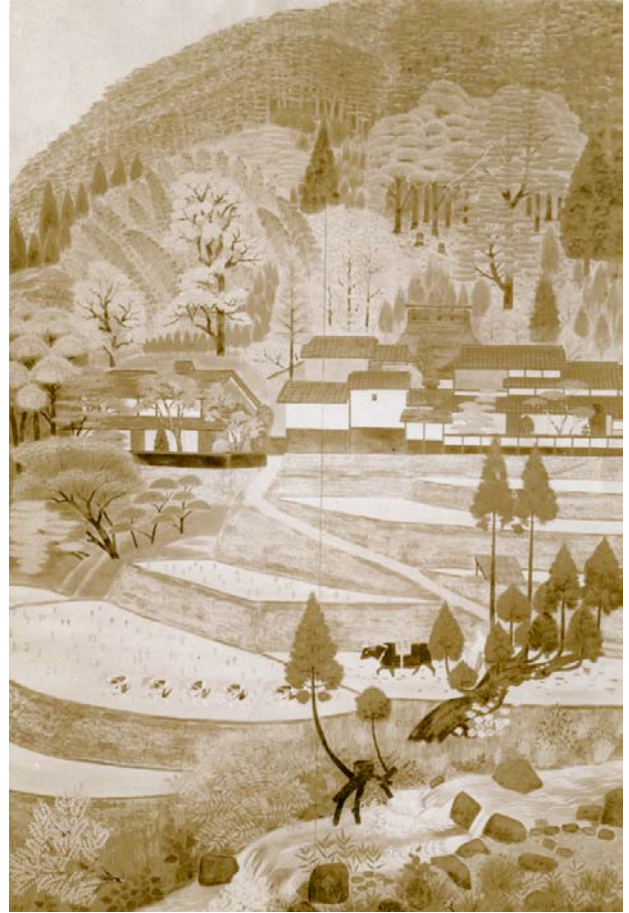
1932(昭和7)年8月以前の制作の状況を伝える本広の日記、『制作餘録 一』が大分県立芸術会館に収蔵されている。

[凡例]

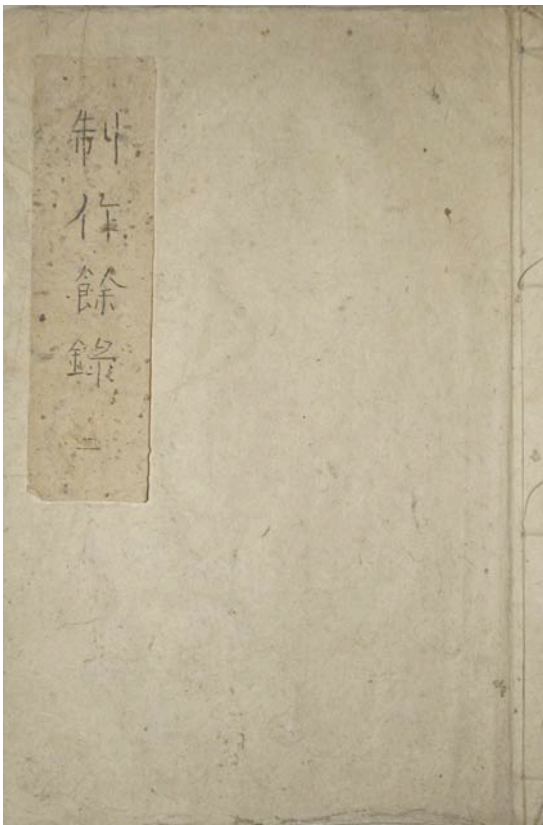
- (1)この翻刻は、本広礼の制作日記「制作餘録 二」の全文の翻刻である。翻刻者により適宜、脚註を付している。
- (2)原本の画像は、スケッチ画あるものを中心に、代表的なものを掲載した。また、本誌で制作対象となった本広作「雲ヶ畑五月」の画像等を参考として掲載した。
- (3)翻刻での文字使い等は以下の通りである。
 - ①適宜、句読点を付した。
 - ②漢字、かなの使用は原本通りを基本としたが、適宜異体字、俗字、新字体に直した箇所がある。
 - ③□は、判読し難い箇所を示す。また推定箇所については [] に入れて記した (例：□^(何))。
 - ④難読字には、読み仮名を振った (例：霽^{はれ})。
 - ⑤誤記と思われるものは、(ママ)を付した (例：八^(ママ))。
 - ⑥その他の表記については以下のとおりである。
 - ・ - は、みせけち部分。
 - ・ () は、作者による追記。
 - ・ < > は、翻刻者による注記。



大分県師範学校時代の記念写真
右端：本広礼



本広礼「雲ヶ畑五月」1932年
第13回帝展 初入選



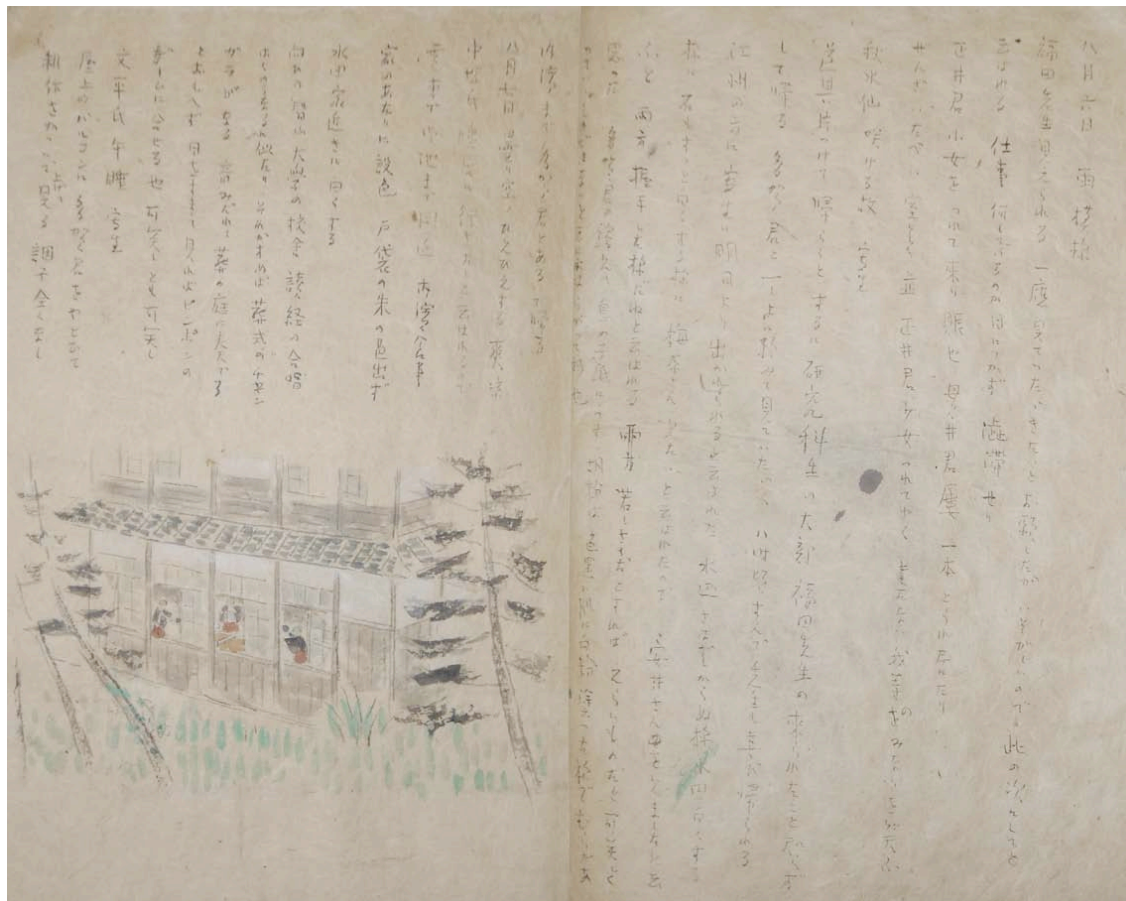
「制作餘録 二」1932年9～10月



「制作餘録 二」 1932年9月3日～4日 4～5頁



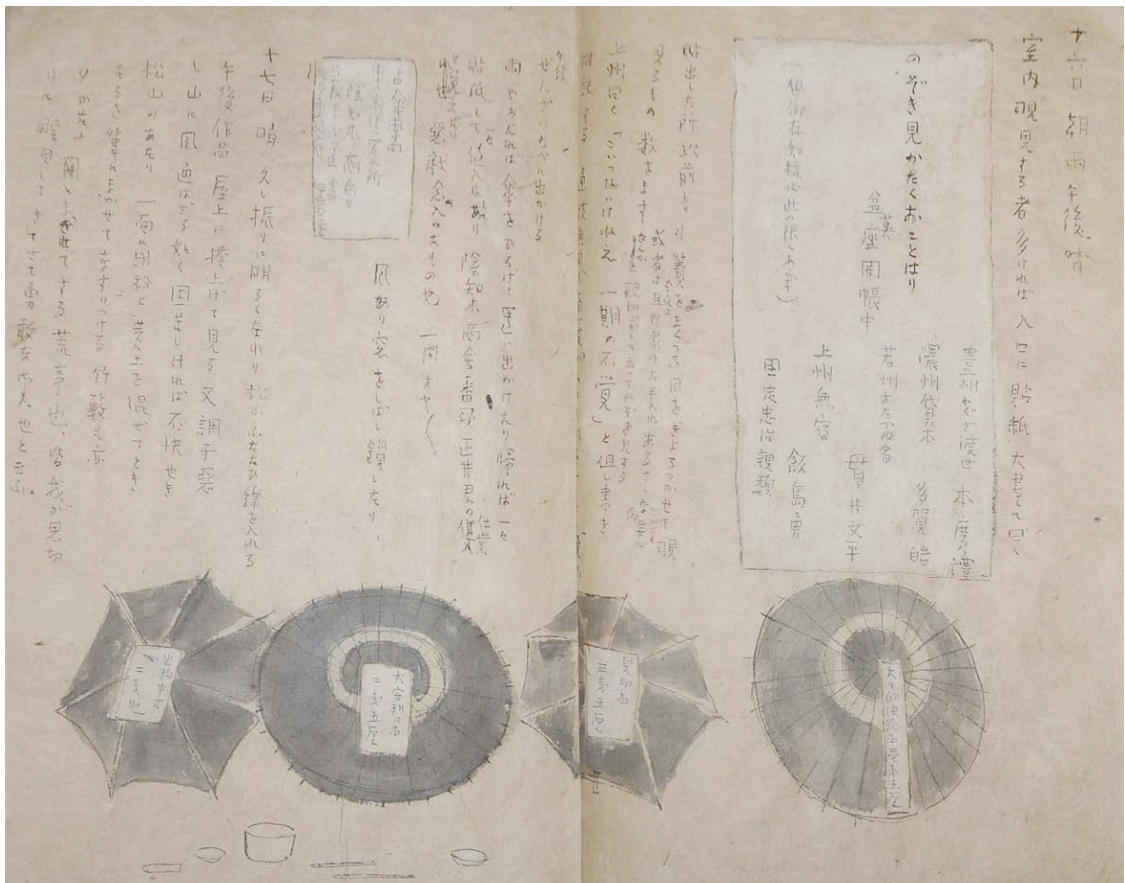
「制作餘録 二」 1932年9月4日～5日 6～7頁



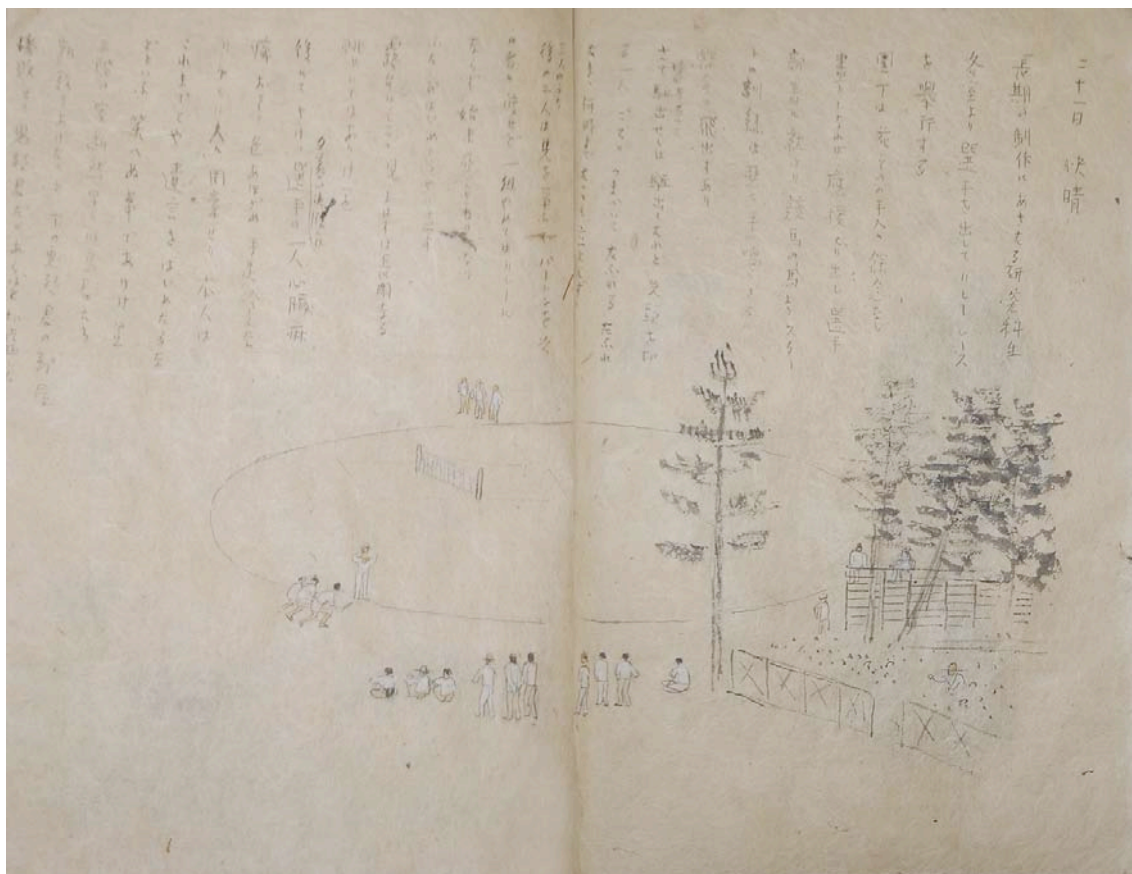
「制作餘録 二」1932年9月6日～7日 12～13頁



「制作餘録 二」28～29頁



「制作餘録 二」1932年9月16日～17日 30～31頁



「制作餘録 二」1932年9月21日 36～37頁

制作餘録 二

〈昭和七年〉九月一日

昨夜の雨霽^{はれ}る。今日は一人(の)道行也^{ただす}(糺の森霧込めて、茂りの重り美しかりき)。アンブレラ用意。小学生、中学生、学期始にて、出町の電停賑はへり。内濱乗換して、食堂に、一人入るは足にぶる。意を決して、縄のれんをくぐる。前にかけておっさん(ヂヨッキをあけて)、ビールの冷やしてないのを注文する。寒いからと云ふは、可笑し。美校生徒、登校喧騒也。杉の幹塗代へ、河べりの草むら、黄口の茶石交ぜし、緑青をかける。稍^{やや}、明るくなりたり。家の庭木を塗る。畔の線いれしに、かたきに過ぎたり。水に胡粉塗る。流れにあまりの絵具で筆に任せてかきこみしは住吉屋にミルク飲みにゆく。院展の入選発表、荒木君の名あり。隣室、(阿)弥陀くじするからと誘われて加入。残り織に福来たらず。最高十五銭。多賀君駄菓子を買に来る(小山の如し)。皆辟易する。西瓜を次に買ふと(云ふの)で、我がくじ作るに、又残りくじ悪く(使となる)。松本君同行。(二人とも)今日貧乏くじ(ばかり)ひく。(二個のうち)縞入りは不味かりき。七時頃、帰途に就く。内濱で食事。食欲不進。植物園下車。手拭いを十銭アトで買って、銭湯に入る。中塚氏来たり。しばらく談話。十時過就寝。

九月二日 晴 裏庭、萩のうら花つけて、地にしだれる。安井さんの絵をさがす。荒木君訪問、留守也。疎水べりに加茂川に出る。出(雲)路橋めがけて家のかげについてあるきゆけり。鞍馬口で食事を摂る。不進。身体疲労せるにや昨夜も汗出たり。御所の前の(鎧戸のはまった)洋館を見ながら、混み合う車内に立ってゆく。秋意^{ゆうない}、牖内にこもる。水田に青泥をぬるとて、皿に焼付ける。胡粉や雲母末まぜて用ふ。稍、意に近きか。杉の葉白緑に緑青交ぜて覆う。仕事すすまず。徒に筆^なを擲げて無為。鮫島君来り我室四名となる。ミルク飲みに住吉屋へゆく。

六時頃、西田君といっしょに帰ってゆく。東山線電車のうち、消防自動車赤く火の如くうなり(追抜きて)ゆく。□^[何]処だと気を配ってみると都ホテルだア。お、あんな煙、町の横町空家のきれまに、むくむくふくらんだ雲を指す(嘘云ってらア)。出町で乗りかへると美しい女人達多し。横も前も女ばかり(黄いうすもの□^[に]、お乳を□^[す]かせた、お嬢さんと弟)。電車にも性別があると思った。鞍馬口の(行きつけの)食堂、売切れてたので、一寸先の家に入る。不味し。大西さん方より(乗車)割引券借りに来る。正巳さん訪問。大西さん達四名、児玉さんの死を悼みにゆくと、文楽をスケッチしてたら、後から呼びかけた。それがお別れとなった。脳充血だったと云う。あ、頭が痛い^{おおほけ}とたゞそれだけで、醫師の駆付けた時には、はやこときれてたと云ふ。大西の奥さん、大歩危旅行のおはなし、明田さんと汽車をまたせた話、抱腹せり。池田駅の駅長^(マ)さんをして、開通以来始めてだと云わしめたさうな。制作見せて頂く。

九月三日 朝小雨

アンブレラ携行。出町の電停にて、ポケットを探ると墓口なし。忘れた。胸のポケットには、銭湯の剰余五銭玉と札がある。一銭あれば(学校に)、ゆけるのはゆける。ゆけさへしたら、どうにでもなるに、仕方がないと引きかへす。途中、本屋の若者の自転車で来るに逢って、助かる。内濱で食事。

川そひの黄ばんだ草むらに伝色。住吉屋でミルクを飲む。今日より秋草図巻作りたいと思ひ、庭園を逍遙する。園丁、手入れにいそし。松山君の室に入る。一しよに屋上に登る。屋上に放尿するもの多し。其の云ひ草、かはいた壁にやると、すぐ蒸発してしまふ。

一巡して室に帰り、すだれを巻いて中に入ると、池田さんの名刺をもって来られた、奈良の人、待つて居られたり。我が作を見て、後山を秋なりやと問いを發す。げっそりすると云ふよりも、其の目の認識不足をわらひたくなつた。下の教室、鬼頭君の作、其の他を案内する。後手組んだ態度を不遜なりと思ひ、皆に気の毒だと、こちらが縮まる。中堂氏の所へつれてゆつて、しばらく制作の意見交し居たれど、我傍を云つて居たり。長居無用を心得えず。帰路、多賀君曰く、あの人知っているのか。僕、いやはじめてだ。鮫島君、ちょっと頭変なのではないかしら。僕、どうかしたのかね。多賀君、この竹垣を見て板かと云つた。それから鶏頭花の色は、こんな^[に]見える(もの)かと云う。参つて(しま)した。僕さふかへえ驚いたね。あちらの室でも或人が(僕に)、大ぶ出来たかと訊いたので、さあ六七分位のものでせう、と返すと、横合から、あれはまだ半分位なものでせう、まだまだやらねばならないだらうと(勝手なこと)を云うので面食つた(一寸、むかついているのだぜ)。皆、曰然なり(どうも頭の様子か変だと)爆笑。空、地塗。松山、黄緑と茶緑をかける。水に緑青を塗る。石垣立てて眺めるに、上部に^お壓されて、腰抜けのかたち。黒い目に所々調子つけて(見ると)、夕暮れの中に調へる如し。七時、西田君と相つれて帰る。鞍馬口で食事。うまし。夏山訪友絵巻をひらき、釣の一部を書きなほして見る。入浴、十貫九百匁少々きれる。鐘ヶ江氏の画室、草稿なりたり。井上氏に会す。しばらくはなしして、麦僊画集、大観作品集、其の他画稿写生類持帰る。十一時頃就寝。鬼頭君より受信。今日貫井君、缺席。

九月四日 晴

朝の(ラッシュアワー)、電車混みあわず。日曜なるに気づく。内濱で食事。やがて入り来たりたる老夫婦、手さぐりにわが前に並び、かけ飯と汁を注文する。茶を注ぐに、耳もとで音をききたりなど、不自由のかぎり。それにて、相いたはり合う^{れんびん}憐愍なり。むねつまる様也き。流れに青泥沈める。汚し。此の川、砂金産出するなど興大を飛す。石黒々と塗つて、石炭の如し。胡粉にてつぶせば、コークスの如し。仕事著しからず。午後西岡氏、軍服を着て来られる。軍曹也。演習に就いて、強行隠密のこと語られる。茶をいれながら、朝丹羽の絵具屋が持つて来た、鍵屋の最中をたべる。強い男の話、爆弾三勇士の演習、審判官二人に戦死宣したるを、ひとり破壊筒かかへて、鉄條網の上にあぐらかいたり、皆、^[中]となせりと。宇治川で鉄船きれて流れる。ひとり軍服の^{まま}儘、水中にとびこみ、^{らん}纜ひっぱつて、ひきとめたと云う。西田君と一しよに帰

る。鞍馬口の食堂で食事、中雨となる。借してくれた傘は、ハترون紙張りの(開けは)八角形の傘也。電鳴紫閃。出雲路橋上で、濡れゆく学生にさしかけてあげる。高島屋で買ひました。かつて雨の中にも、虫鳴すまして居たり。

九月五日 雨 朝借りた傘を、一寸写生。裏庭、萩眞盛りの夜来の雨風たまる水にみたれふし、萩の塵、^{うか}泛び美しい(傘かへして食事)。烏丸通りから電車。鎧戸の家、見んとおもひしに、満員の車、出口のドアの所の押しつけられて、顔も身体も歪むばかり也。反対側のまどから、商家のぬれたいらかの並(び)を、半ばいた^(ママ)める街路樹にさへぎられて見る。雨で乾き悪く、^{うちわ}團扇を図子君より借りて来て、あふる。

田植えの人物、一列に入れて見る。福田先生¹来られる日なれば、見て頂かうと思っていたが、来られなかった。胡粉解いて、皿の底に魚の形にして沈め置く。

午後四時頃、貫井君の所にとどけられた葡萄、一箱皆あつまりて手を出す。種子がなければいいになど、勝手な事云って、舌でしぼるので、舌がだるくなった。と云ったのは多賀君。銭湯に出かけて、雨に降り込められる。傘借りて帰る。

貫井君にもらった葡萄図 禮(白文方印)

^(ママ)
八 月六日 雨模様

福田先生見えられる。一応見ていただきたいとお願いしたが、いそがしいので、この次にしてと云はれる。仕事、何しているのか目につかず、渋滞せり。

正井君²小女をつれて来たり。賑也。貫井君^{しばしば}屢、一本とられ居たり。ぜんざい食べに、室から正井君少女つれてゆく。きたない我等を(の)みなりを笑う。秋水仙咲ける故、写生。

道具片つけて帰らうとするに、研究科生の大部、福田先生の来られたこと知らずして帰る。加賀君と一しよに頼みて見ていただく。八時頃すんで、先生も喜び帰られる。江州の方に写生に、明日より出かけられると云われた。水辺さわがしからぬ様、水田白くする様に、石もずっと白くする様に、梅原さん見たいと云われたので、安井さんを見ましたと云ふと、両方握手した様だねと云はれる。両方若しそうだとすれば、えらいものだと可笑しく思った。多賀君の絵見て、鳥の子紙にうすい胡粉は色黒い肌^{おしろい}に白粉塗った様で、むらがあつていいものではない、と云は^[る]□は、うがつて妙也。

内濱まで多賀君とあるいて帰る。

^(ママ)
八 月七日 曇り空 ひえひえする爽涼。中塚氏、鳩居に行きたし云われるので、電車で御池まで同道。内濱食事。家のあたりに設色。戸袋の朱の色出ず。水田家近きに白くする。

¹ 福田平八郎。この時、京都絵画専門学校助教授。

² 正井和行。

向かいの智山大学の校舎、読経の合唱、はちのうなるに似たり。それがすめば、葬式のチャンガラなる。音みだれて、葬の庭に奏でるとおもへず。目をすまして見れば、ピンポンのゲームに合せる也。可笑しとも可笑し。

文平氏午睡、写生。

屋上のバルコニに、多賀君をやとひて制作をかついで(上げて)見る。調子全くなし。

文平さん午睡 禮(白文方印)

思切り正面、光線でいい調子つくまで押しすすめる事にする。多賀君と京阪まで同伴。内濱で食事。多賀君我があゆむ姿スケッチ。殆ど風来に近し。

大西氏宅に寄って東京土産頂く。院展の絵葉書と美之國。宿屋の手拭鉢巻用也。

九月八日 小雨 松山君と雲ヶ畑行き約あれば、早朝起床して、爐辺古老少々手入れ用意して植物園までゆけど、雨をおそれて来らず。七時まで待ち、又引き返したり。制作よく見えず。布に水つけてごしごしこすって見たりするが、思はしからず。

黄緑をかけて、(若)葉の黄をつゝいて見る。快からず。筆を投げて□□ 記入に午後むなし。多賀君、スケッチの我がすがたを模して挿入する。感よし。

本日より火鉢を室に持込んで火を入れる。膠固まるほど涼気也。

九月九日 雨 出町の柳、アンブレラ差上げて障(触)って見たり。葉の色黄ばむ。電車に乗るに雨繁し。黄緑、強い目の色をべたゝゝ若葉に塗抹する。調子好くなりかゝる。鬼頭君より小包来る。包を解けばお菓子と獅子面あらわれる。獅子の紙箱つぶれて、片々たる。鼻口どこにあるかわからぬ程、粉碎せり。

正井君写生用に供せしもの也。菓子下の鬼頭君の教室に半分わかち、残りを皆で摘む。美味。同封冬木君宛の牛の写真、写生出てくる。西田君と一しよに、帝国館国士無双と御詠次郎吉格子見る。前者愉快也き。

正井君、膠ときて獅子をつぎ合せ、他に仕事出来なかったと。獅子こわ毀れたれど、十六とはならざりきと笑合へり。帰れば鬼頭君より受信。廣田首藤先生³より受信。

九月十日 雨

後の山、木の幹、思切り黒い色でためて見ると、急に画面活気つける如し。竹藪の一本一本くまつけると、深みも出かけた様也。木の下のくらみをつけたりして、少し宛楽飲をゆるすことが出来る様になれり。ひる過、多賀君制作の鶏頭花の被写物を(借りて)写生したり(多賀君の云ひ草、

³ 首藤雨郊。前、大分県師範学校教諭。本広の同校在学中の恩師であり、福田平八郎の恩師でもあった。

君の写生妙に味あり。墨がよいのか紙がよいのか。こいつやるまいぞ、\ \ \ \)。鶏頭花はもう胎している。黒い実を(ふると)ハラ\ \ と、こぼして無数に床を(に)しきたり。西田君部屋に来たりて曰く、皆余裕しゃく\ \ \ とやっているのだからかなわぬ、と逃帰る。ポケット乏しくなりたれば、帰って正巳さんを訪ねる。牧さん所に寄って、しばらく宇沢君の草稿見て居たり。牧さん本紙、骨描中。

大西さん所で讃岐の獅子を借りる。二階で暫く制作を見せて貰ふ。

我が室、浪花節大流行也(文句、いやしい稼業はしてゐても、私もやっぱり人の子じゃ。情にかはりはないわいな)。上州の親分は飯島氏、若州貫井氏、濃州多賀氏。名稱^{めいしょう}の代りに口名を用ふる也。こは非人仲間に於ける如し。

それから毎上州の丹那と云へは、晝のねせおこしの手傳ふのをたのむことに通ずることとなれり。且那と敬稱されるからには、頼まれて(あえて)あとに引かないと云ふ(気概を示す)也。

九月十一日 早朝、長野さんをたづねてお金借りる。朝顔写生(おししの面かぶって、房ちゃんをおどかすと泣いてお母さんの後にかくれたり)。

糺の森の木したやみ雨ふるつゞきて、きの子生へり。蠟燭に似たるもの、あれ狐のらふそくと云ふのかしら。内濱で朝食(みの虫とらへてぽけつとに入れて置くと、大きな糞をして、我をおどろかせり)。

松山に緑青、水晶末、黄緑等混じて、一带ぬりつぶし、松の足も黒くぬる。全体強くなれり。

首藤先生宛に手紙書く。重い荷下した様になれり。二科の絵葉書十枚、伊藤武夫さん宛に送ってあげる。久し振りにてミルク飲みにゆく。

貫井君、西瓜の饗応にあづかる。観面^{てきめん}、尿意しきり也。立てつゞけに三度、前を押へながら階を下る。

面相筆もとめ来って、杉の葉、緑青すみ。白羽末、さびった等にかはで盛り上げてかきこむ。相当時間を要したり。

菊池⁴先生見えられる。

夕暮れ、もはや今日は我が教室に入られまいと帰る用意して下におりた所、室に来られたときいて、ひきかへせり。夕暮絵見えず。二十日頃来る故、自分で出来る所までやる様に云はれて帰られる。町にでると西田君と約せしが、おくれしまゝゆかず。内濱で食事。鞍馬口通りあるいて帰る。鬼頭君より受信。瀧口さんより詩帖、蝸牛贈らる。銭湯にゆき、九時すぎ就寝。少々いつもより早し。

九月十二日 雨

鞍馬口で朝食。電車混雑、矢野君と一しよになる。

⁴ 菊池契月。この時、京都市立絵画専門学校長。

杉の葉の上、緑青の荒いのをかける。石垣にはじめて線を入れる(さびつたにすみをまぜたもの)。殆ど午前中要したり。

四十塚氏、旅行より帰られたりとて室に来る。

雨ふりみふらずみ、室内暗し。杉の幹一度赤くし、次に思切り黒くしたり。ミルク飲みに出かける。(噴)水盤の秋の雨。室暗鬱にして仕事ならず。ぜんざいたべに行かうと云ふ議出で、相つれてゆく。秋、水仙雨の中に白い花ひらきたり。

水きはの草、石、(流)水、手入れ。暮れぐれに水田の苗に色さす。

(今日は)仕事率、(稍)多きやう也。

多賀氏、昼頃来っておはようと云ふ。今頃おはようもあるまいと云へば、跡水の溺死見たんだと其の状をのべる。

上州、若州辨当を食べてるとき、惨(状)側に糞(まのあたりに)髣髴せしめて、いやがらす。

西田君と一しよに帰る。鞍馬口通り、町の中でもないてる虫。食事してひとりかへる。出雲路橋のあたり、道ぬれて(うつる火かげ長く)、霧でも前にありさう也き。

九月十三日 雨

糺の森(の道)、雨にうたれる萩しほらし。杉の穂、緑青をナイフで削落し滑にする。

手にさわりて快し。パレットナイフ以て、胡粉を藏の壁にぬりつける。宛然左官こてでかべ土ぬるに異ならず。土藏、亦黄土胡粉をなす也。衆瞠目せり。ぜんざいたべにゆく。今日は濃州の丹那の振舞いにあづかる也。水田前方を暗く、山つきの側を白くする。牛人物のあたり、稍気持出でたり。今日も天気定まらず。室の内暗きをこぼしながら、筆を動かして居たり。

夜、正巳さん訪問。鬼頭君宛手紙。こはれたお獅子かきこんで出す。

正巳さんの自分のただ一つの慰藉いしやとなとして居たものを、かへて人につくま(した)ことを知り、感慨する久し。借してたお金五円呉れた。

九月十四日

稍、天候恢復かいふくの様。引摺下駄つきかけて家を出る。杉の葉に調子つける。家の瓦、屋根塗代へ塗代へ、巧く色さえず。不快也。博物館でも行ったらと、住吉屋でミルクとカステラを撮とって後に出かける。館内しよさく蕭索。大雅堂、(羅)漢の幅、万福寺のものかゝりてありたり。絵画よりむしろ墨跡の方、心にひかれたり。

明日、仲秋名月也。萩と薄折、そへて山より下りくる人に会ひたり(一度、紅殻塗の戸袋などゝ、すみでつぶして又色をさしたり)。白群、隣室の火鉢、アルミ鍋でやけど。火ぬるく充分ならず。そのまゝにときて、一ぬり、一気に瓦をつぶす。多賀君同伴、内濱で夕食。相つれて京極へ向かひ、キネマクラブに入りこむ。北海の漁火、凄(波)浪にもまれる舟あり。中村政造君に似たる、奇術師出現の実写あり。金魚をのみこんではきだし、アルコール見たいなのも腹一つばいのみこんで、火にふきかけて発光させたりした。最後の活動屋往来。上州の親分に似た爺さん、ちょ

こゝゝ走りまはれり。睡くてたへず。はねて出れば、雨降りたるらし。しき道はぬれて居たり。バスで帰る。

壁を塗る図

九月十五日

満州国承認の号外出でたり。

焼き白群をつくって膠でとき、瓦屋根一枚宛ほり塗り。市松模様のごとし。割合と暇食らて、昼まで要せり。芦塚君来る。午後障子をたてる。秋風もそよふけば（そろゝゝ）障子立ててもよからんと思へり。藏の明かりとりもつきたり。家(のあたり)線入れて、少々固くなりしか。仲秋の名月、それにあまくもおほひて姿見せずと覚えし。月あるもよし、なくもよし。月見の宴、はな忘れそと上州、若州、應酬しつつ可笑し。ぜんざいたべにゆく。榮亭の親爺、人並に遊ぶ時遊び度いと、自家の商売のままならぬを人にかこちつ、新参の女中をとらへて、こりやこりや女、名は何と云ふのかと、呼び出せり。これも可笑し。

帰りて銭湯ラジオ、月見の夕の放送、雨で駄目也。廣沢池で月見の放送は出来ず。虫声を入れて、阪倉氏の講演にやむ小雨。道に虫こゑ繁し。

十六日 朝雨 午後晴

室内覗見する者多ければ、入口に貼紙大書して曰く、

のぞき見かたくおことはり。

盆(莫)座開帳中

(但、御存知様は此の限りにあらず)

豊州やぐざ渡世 本廣禮

濃州貸本 多賀皓

若州おたずね者 貫井文平

上州無宿 飯島勇

国定忠治親類

貼出した所、以前よりも簀をまくって目をぎよろつかせて覗見るもの数をます。(或者は、今夜は旦那衆のお手入れあるさうな、いづれ方も御要心)なんかと親切ごかしに云って、のぞき見する。上州曰く「こいつはいけねえ。一期の不覚」と但し書き附記する。通技無用で通技が知れと、軌を一にせる類也。笑止千万也。

午後、ぜんざいたべに出かける。

雨やみたれば、傘をひろげし置は出かけたり。帰れば、一々貼紙して(一々)値入れ(して)あり。陰知木商会番頭。正井君の値入れ也仕業と覚えたり。悪戯念(の)入ったもの也。一同おやゝ。

古傘専門

中古高價買入所

陰知木商会

御一報下さらば、早速店員参上値入^{つかまつ}仕^り

電話(宇治)800番

風あり、窓をしばし鎖したり。

大々の決死品一錢五厘

見切品 三錢五厘

大安利口品 二錢五厘

出物中古 二錢也

十七日 晴 久し振りに明るくなれり。松山^{しょうざん}ふたたび線を入れる。

午後、作品屋上に^{かつぎ}擔上げて見る。又調子悪し。山に風通はざる如く、固苦しければ不快也き。松山のあたり、一面に胡粉と黄土を混ぜてときたるを、筆にまかせてなすりつける。竹藪も又夕方の闇にまぎれてする荒事也。皆我が思切りに瞠目してきて、さて勇敢な御人也と云ふ。

十八日 夜も絵の事気がかりにて攝眠の時間短し。早朝起床して登校。山全体に胡粉かけて、それから仕事はじめにかかる。押さえられて山のすがた、下と調子合わせてやゝよし。

松山君来たりたれば、しばらく画前にたちて(ともに)いろゝ考へる。少し画面の暗ささへ除けば、調子はとゝのふてゐると語合ふ。

本日、満州事変記念日。曇空。町々のポスター妖、雲未だ去らず云々とあり。青年訓練所員、列伍とゝのへ岡崎方面に向ふ。砲聲、殷々としてひびく。国防の演習也。四条通り、上海其のままの假想として、銃聲火交へしと、うはさに聞きたり。松山快からず。骨描して白紙の時にかへる。松の足を赤く塗り、葉を緑青させば蕎麦の如しと云ふ、酷評を得たり。残念なれど、自分も亦しか思はざるを得ざる也。

十九日

天候快復。正井君、籠に葡萄提げて来たる。檜の葉に^(ママ)戴せる青葡萄美しければ、制作を^(ママ)きて写生する。後山一带、一日中仕事(心)苦し。鬼頭君より来信。二十一日入洛の由。

二十日

仕事危機を脱せる観ありて、稍心静まる。松山もどうにか落着きたる如し。
制作あます所いよいよ十日也。多賀君、夜業はじめんかと云ひ出したり。
カレンダー壁にはりつける。一同緊張の色あり。
松竹座にプレジャンの船唄見にゆく。ムーランルーヂユの夕べ、奏樂あり。

文平さんひとり遊ぶ 禮(白文方印)

二十一日 快晴

長期の制作にあきたる研究科生、各室より選手を出して、リレーレースを舉行する。

園丁は、花そのの手入に餘念なし。

晝ともなれば應援くり出し、選手部署に就けり。競馬の馬よりスタートの訓練は悪く、手の鳴らざるに、^(ママ)縣命に飛び出すあり。

さて(皆そろって)駈出せしは駈出したれど、先頭を切る一人、ごろりつまづいてたふれる。たふれたまゝ何時までたっても立上らず。

(三人のうち)後の二人は先を争うて、バトンを次の者に渡せど、一組やめてはリレーにならず。始末悪しきものなり。

ふたたびはじめからやり直す。

露台に立って見まはずは、長閑なる眺めにてはありけり。

後にてきけり、(夕暮れの決勝には)選手の一人心臓麻痺おこして色あほざめ、手足冷たくなりゆくに、大に周章せり。本人はこれまでとや、遺言をはじめたる、などといふ。笑えぬ事でありけり。

三階の室、断然早く、川島君たち凱歌をあげたりと。下の鬼頭君の部屋惨敗せり。鬼頭君だにあらばと切齒した。

その鬼頭君は、燕にのって今入洛の途。四時四十分着、を出迎へに京都駅にゆく。

電車の中で院展の話、青龍社の話きく。

植物園下車、一本松の稲、田穂みのり案山子をつくるを見かける。文楽の人形使さながら也。

人形芝居の話、壺坂の舞台に就いて、はなしながら来た折柄、興深かりき。

名古屋のお寺の尼さんがくれたと云ふおすし、二人とも満腹。

二十二日

早朝起床。相つれて登校。加茂の森、下草の中曼珠沙華赤く咲く。鬼頭君、仕事進んで居ると云ふ。

家の雨戸の色不快、手入れすることにせり。茶紙をはって見るによし。黄土胡粉でおさへる。稍むっくりした感出る。水そひの下草に移る。岩絵具重りたる上なれば、仕事やりにくし。

二十三日 秋季皇靈祭

彼岸の中日也。寺の鐘も(殷々)一きわに心にしみる。川べりの草むらの仕事。

晝食に鬼頭君と一しよに出れば、飯島君強い黒糸を頼むと云ふ。OK と返事、針の目の通らない様な糸をと云ふ。と買ひ来り、駄菓子豆棒を室員の土産とかひかへる。糸巻をさせられる。年よりめいたるか、仕方ない。お彼岸の中日にあたるからと我慢、糸ふとけれど針に通る。飯島君ズボンの修理、貫(井)君の家からおすし来る。

二十四日 水邊の仕事まとまり難し。苦慮終日。川べり胡粉でかける。石弱められて、画面樂になりたり。竹藪の黠体入れる。

二十五日

福田先生見えられる日也。最後なれば、一度見ていたゞきたく思ふ。先生のお出でになる頃を、はかってたのみにゆくと、皆見てしまつてからにしてくれと云はれる。よし、今夜は徹夜だと腹きめる。胃の工合面白くなし。夕食抜く。夜に入る。夜見ると畫美しく見える。

(七条の映畫館で、清水次郎長を見る)

鬼頭君の室に入り、火鉢のそばで紅茶を啜る。炭なくなりたれば、炭小屋にしのびこみ、炭たはら^{かつぎだ}擔出し破つてとる。入れものは食堂からもつて来た、食器覆の風呂敷也。

熊犬の皮のチョッキ草薙君のもの。着るとあたゝかし。猫のなきごゑ真似て、そこらをはふて徒然をなぐさめる。飯島君どテラ着る。多賀君のとつてきた桐の木へし折つて、厚い紙でつばをつくつて長わきざしとする。全く親分也。但此の親分、頭甲斐なし。すやすやと子供の様にねむり、枕もとで大声ではなししても、一向に気づかず。

鬼頭君少しねむる。我はつひに一睡もとらず、ほのぼのと外の面明るし。屋上に登る。覚めたる京の町俯瞰する。(身体)霧にぬれてつめたし。悠々放尿。あつつけねえ、一人あがつて来やがつた。上つた男も放尿する。

二十六日

七時すぎ、鬼頭君の繪みてしまつて、先生に見ていただく。一体に寒い感がある。むっとする、若葉のいろがせまつてほしい。土坡に小筐入れる。松山、金泥入れること。杉の色の統一等について、注意。

内濱に歩いて食事に出かける。二人とも身心へとへと也。室員にお土産の菓子、一袋五錢。二人で十あまり買ふ。疲れて仕事成らず。やめて帰るに若かず。とうとうとうた^とと皆に云はれる。へたばつたの謂也。全くうたとうた、うたとうた。

糺の森、檜垣茶屋でおはぎたべる。橋の上に、小女達写生して居る。入日がまだらにそめる、木下道。おはぎはおいしかった。帰つて入浴、洗ふのも大儀。夕食もとらずにねむる。六時から六

時までぐっすりよく眠った。

二十七日

そろそろ繪の表装に取かゝる者多し。表具屋、サン屋、校内に入る。

水邊漸くまとまりかける。左端の川柳の木、やゝ調子よし。青草は未だ。

帰道、四條で下車。諸國民謡大會と云ふに入る。(低)俗也。辟易する。二人曰く、もう夜遊びはやめようぜ。

二十八日

(東山三條蓑部表装屋に裂地きれじを頼む) 鞍馬口通りの柵屋に頼みに寄って明晩までにしてくれと云って置く。仕上げの細部多し。柿の葉もりあげの點体をうつ塗かへ竹藪の仕事(大)杉の幹等。午後、宇田先生⁵見えられる。

雨のかへり、西田君と三人、一つかさに入って京極通る。歌舞(ママ)妓座に入る。不如帰と夕なぎ草紙、不如帰はよくない。昨夜のことば(よもや)忘れやしまいに(また夜遊び)。鬼頭君宛に、かまぼこ豊橋より来る。

二十九日

あと三日にせまる。柿若葉、(欒林)點体を入れる。すこししまつ(て)来たり。家の中の庭木や燈籠かきおこす。細部仕事多し。夜に入りて柵屋来る。あれだけかんで含める様云ひ置きたるに、寸法をあやまるは心得(え)ず。今夜にもうちに来ると云ふを、氣の毒に思ひてことはる。豊橋曰く鬼頭君宛にかまぼこ来る腹痛たへがたく、吐瀉、下痢心配せり。

三十日

フィルム求めて、通学姿を加茂の森で撮影する。学校に来る入途中、智積院下で西田君に逢ふ。昨夜の手違を話し、今朝うちに来て居ると云ふ。(屋上)露台でわくつけする。晝まで無為。家の中の樹木、點体入れ、黄い若葉も仕上げる。庭木の葉かきこむ。牛の顔、目玉、前の土坡、雑草、杉の幹、竹藪、細部の仕事多し。苗を田に入れる。人物の笠(顔の色、水の線)。夜に入って表具屋来る。停電二回せり。あとをたくして帰る。鬼頭君腹痛しきり也。明日は最後也。早朝起(き)んとて、寝に就く。

十月一日 表装成りてあり。よく色と調和せり。細部手入れ。晝前に寫眞屋来る。横にして撮影。晝、明月に食事に二人出かける。

人物の顔、鼻と目と口をかきこむ。

⁵ 宇田荻邨

埴輪の感也、と多賀君云ふ。眉描かざれば色気無し、と飯島君云ふ。植付の苗を入れる。出品の時刻迫る。西田君促し来る。立てて裏面に大書。雲ヶ畑五月と。住所、姓名(エンサエンサと)四人がかりで擔(き)下す。出品願書にかきこむ。忙しかりき。加茂の一同も出品すましたり。篠村君、岡田さんの顔も見える。繪具皿、一さいかきあつめ、矢たらに箱につめこむ。長い間、一しよに仕事した仲間に(兄弟)世話焼かせたな。(これで)あばよと挨拶する。玄関に荷物を出して、鈴木君タクシーを捕へに、そとにゆく。噴水盤にこしかけて、すんだすんだと、校舎の方をふりかへる。(蜂のぬけがら見たいなものだ)もう一齊に、灯の點ぜられた町をすりぬけてゆく、自分の車はシボレーか、何か知らないけれど、走れ走れ、前をさへきるストップの赤い信號盤、いそいそまはれ、青い灯に。鬼頭君も自分も、奥に傲然ともたれてみると云つても、前には、堆い繪具箱や文庫で足をせばめられ、膝には重い皿でちひさくなって(きゆ)屈な事、限りないが、気だけは凱旋將軍の様に、悠然と、(凱旋將軍と云つても)勝ってるかか、負けてるのか、そんな事は、関知するところでない。加茂の流れに、いふし銀散る。柳の風情(亦)ひとしお一入に心ゆとりあれは、皆かな^[類]□、北方さしてかけて行く。巢をつゝかれて、一齋にうなる蜂の羽音に似た、(心のしん)動をおさへようとも抑へ得ない。家に荷物下(ろ)すや、さあ行かうと町へ出る。バスで三條へ。青の光とデリシアス。一場面、一場面美しい繪をなす山の溪間の家の並び、水にうつた家、逆光の樹林、雲と月、フランチェスカ風の人物、美しかりき。デリシアス。ゲイナアの可憐な演技、微笑まし。

スターで夕食。

京極歩いて、櫻井屋で、名古屋へのお土産のフランス人形を買ふ。

烏丸丸太町まであるいて、中野寫眞館で、鬼頭君の制作寫眞もらふ。人物の顔、黒いきづあり。焼直しをたのむ。

コーヒー飲みながら、小話。帰ってから、奥の細道(画集)を二人で鑑賞。二時のしらせをきゝて就寝。

十月二日

鬼頭君の荷物をまとめて、鞍馬にバスで出かける。秋のたにまよし。二年前の生活をなつかしむ。画架貰つてすぐに、引きかへし、池田さん訪問。午報をきいて、暇乞して立つ。タクシーで駅にかける。物産館で食事。一時半の燕にのる。さようなら相棒。

さあ、ひとりになってしまった。桃山の先生⁶宅へでもたづねよう。

⁶福田平八郎